

Title	駅構内と車内における音による社交性
Sub Title	
Author	Manea, Pierre
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.76 (2013.) ,p.141- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成24年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000076-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成24年度 博士課程学生研究支援プログラム 研究成果報告

駅構内と車内における音による社交性

マネア・ピエール

はじめに

本報告は、著者が2009年より継続して行ってきた研究課題、「いわゆるソウオンと共に生きる一鉄道の音環境と音表情を経験する」(仮名)について、2012年度の調査の一部の成果を提示するものである。

問題の所在

この研究では、都市における交通機関の乗客の経験に焦点を当て、「音情報」の実際の使用に関する記述を挙げながら、「騒音公害」の複雑な定義を脱構築したい。そして、経験の中に埋め込まれた騒音の定義を考えていきたい。

「通勤の音」、つまり日常の音経験を研究するためには、いくつかの落とし穴を避ける必要がある。例えば、音の現象的な感覚に限るアプローチ、又単なる美的なアプローチ、あるいは音響学を越えない調査法は不十分であろう。又、逆に騒音・雑音に対する偏見的なイデオロギーを含み持つ研究動向も望ましくない。「情報」を提供する音というのは、必ずしもきれいに録音され、理想的な環境で流されている音のみであるという訳では決していないからである。そういう訳で、「音」の研究の先端を行くサウンドスケープ論 (Schaffer 1994) は、本調査用の具体的な基礎とはならないと言える。

さらに、実際の通勤状況の経験を理解するためには、「static interview」では限界がある (Kusenbach 2003)。被調査者であろうと誰であろうと、意識上に顕在化されていない問題は見落とされることが多いからである。そのため、実際の通勤状況において調査を行う必要がある。

先行研究から調査法の基礎を造る

当然のことながら、本研究テーマに完璧に適する調査法はない。しかしながら、先行研究から学ぶことは少なくない。

社会学者のThibaudは、ルーブル美術館における、美術館の多様な構築的特徴が、絶え間なく動いている見物客の感覚(視線、聴覚)に与える影響に関する調査の際、「説明された旅程 (commented itinerary)」という調査法を開発した (Thibaud 2008)。この調査法は、社会的行動の状態・文脈の本質を強調する。すなわち、「環境に関する被調査者の発言の意味は、その発言が現れた状態と深く関係している」 (Thibaud 2008: 80)。被調査者の言うことと、その発言がなされた環境とが繋がるように考えられた調査法である。ここではこれについて詳説することはしないが、単純に言えば、Thibaudは被調査者に美術館の中の予め決められた道を歩いてもらって、インタビューするのである。

しかし、この方法は移動中の環境との相互作用に焦点を当ててはいるものの、1) 電車に乗るのではなく、「徒歩」が対象であり、2) 日常の「旅程」ではなく、非日常の旅程に集中しているという問題点が指摘できる。

以下に示す2つの先行研究は、「説明された旅程」に基づいた論文であるが、上に挙げた2つの問題を克服することを試みたものであり、これらから大きな示唆を得た。

a) Massonは『乗車中の感覚』では、電車・路面電車・地下鉄における、音の面ではなく、五感による「感覚的な経験」を研究しており(Masson 2009)、「説明された旅程」法を調整し、被調査者と一緒に電車に乗り調査を行った。「乗車中」の特徴を考慮したこの方法は、本論にとって大変参考となる。しかし、Massonの論文は、質的研究でありながら、乗客が予め慣れていない行程に関する調査しか扱っていない。結果として、音環境の日常性ではなく、交通における音環境の美的次元とその美的経験が対象となっている(Masson 2009: 81)。

b) Thibaudの調査法に基づいた、日常における「音」との相互作用を研究した論文には、Tixierの『都市の中のアンビエンスの動的形態 (Morphodynamic of Constructed Ambiances)』(Tixier 2001)がある。日常の音についてコメントをするということは、誰にとっても難しいことであり、被調査者は、音環境の複雑さを「騒音公害」という語彙に単純化してしまう恐れが高い。Thibaudはそれを理解しており、「説明された旅程」では最初から非日常しか対象としなかった。しかしながらTixierは、この問題を克服するためのいくつかの工夫により、被調査者が自分の「日常の音環境」を表現できるような、効果的な調査を行うことを可能にした。「語った音歩行 (Commented sound walk)」という方法である。つまり、被調査者に、自分なじみが深い「日常の歩く道」に調査者を連れて行ってもらい、そこでの音環境を語ってもらうのである。Tixierの方法も、本論には大変貴重な参考となった。

こういった、「被調査者と一緒に」道を歩いたり、電車に乗ったりしてインタビューを行うという方法は、主にフランスのアンビエンス分野の中で発展されてきたものであるが、これは、アメリカで広まっている社会学者のKusenbachが構築した「go-along」法との共通点が多い(Kusenbach 2003)。「go-along」法も、環境が日常の経験に与える影響を無視しない、むしろ環境の役割を明らかにする調査方法である。ここでも、「go-along」法は歩きながら調査を行う方法であるが、社会学者のBissellは、「go-along」法を、電車の場合に用いて、モビリティ状態においての視線について質的調査を行っている(Bissell 2009)。

以上の方法を本論の根拠にして、「通勤における音情報との相互作用」を対象とする調査方法を形成してみた。

本調査は、5つのステップに分けることができる。それぞれの間の分析や編集作業については、ここでは詳説しないが、各ステップについて簡単に紹介する。その場の状況に応じてインタビュー内容を変更する場合もあるが、基本的には以下のとおりである。

1) サウンドマップ (音の地図) に基づいた半構造的インタビュー

まず最初の段階であるが、この段階のみ、乗車中ではなく、普通の状況でインタビューを行う。被調査者に、家から職場までの通勤を説明・描写するよう依頼する。「音」について言及されていなくても、あまり話を遮らないようにする。被調査者に自分の通勤について語らせ終わったら、興味深い点について尋ねる。

次に、家から職場までの通勤における音現象を、自由に表現して紙に描くよう依頼する。その後、描いてもらった図に基づき、通勤をより深く理解するために、インタビューを続ける。この図は、被調査者が記憶している音を刺激し、まさにインタビューの根拠となるものである。これは、被調査者が自分の日常の音について言葉で表現するために有益な工夫であるといえる。

最後に、どのような案内情報を利用して通勤を行っているか等、案内情報について尋ねる。

2) 説明した通勤

次に、被調査者の通勤に複数回同行する。1回目は、自分の通勤を説明してもらう。何車両目に乗るか、どのように乗り換えるか、ホームや車内ではどこに立っているか等、通勤を行いながら説明してもらう。

3) 通勤について貯まった経験を明らかにする

ここでは、被調査者を自分の通勤の専門家と見なし、通勤中の苦勞・注意すべきところをどのように忍耐しているか、又どのように克服しているかを理解することを試みる。前ステップで得られた情報に基づき、通勤を行いながら、半構造的インタビューを行う。

4) 案内情報

このステップでは、被調査者の通勤における案内情報の役割に注目する。通勤を行いながら、その場で見たり聞いたりする案内情報について、自由に話してもらうよう依頼する。この段階を、最低2度繰り返す。自由に話してもらう際には、調査者が予想できない情報が多く得られるが、逆に被調査者に対して、「特に自分の通勤にとって重要な情報に注目して話す」ように直接指示する場合には、より個人化した案内情報との相互作用にアクセスすることもでき得る。

5) 語った通勤

最後に、(Tixierの「語った音歩行」法のように)被調査者にはマイクの付いたヘッドホンをしてもらい(自分の周りの音を、ヘッドホンを通して聴く状態)、つまり技術的な工夫を用いて新しく聴ける日常の音環境について、自由に話してもらう。こうした、なじみが深い音環境から遠ざけられた被調査者は、自分の音環境についてより分析的聴覚態度で描写することもできるし、普段の音について「騒音公害」の語彙ではなく、より多様で深い描写も提供できるようになる。

現在、このパターンに従って調査を行っている。同じ素材について(自分の通勤)、被調査者に幾つかの異なった視点から記述・説明をしてもらうことにより、音について豊かなデータが得られる。こうして、乗客の音情報との相互作用を、文脈としての通勤そのものに位置づけることができる。

参考文献

- Bissell, D., 2009, "Visualising Everyday Geographies", in *Transactions of the Institute of British Geographers*, vol. 34 no. 1, pp. 42-60.
- Kusenbach, M., 2003, "Street Phenomenology", in *Ethnography*, vol. 4 no. 3, pp. 455-85.
- Masson, D., 2009, *La Perception embarquée* 『乗車中の感覚』 Pierre Mendès-France University.

Schaffer, M., 1994, *The Soundscape*, Vermont, Destiny Books.

Thibaud, J. P., 2008, "La Méthode des parcours commentés" 「説明された旅程」, in Grosjean, M., *L'Espace urbain en méthodes* 『都市空間の調査』 Marseille, Éditions Parenthèses, pp. 79-99.

Tixier, N., 2001, *Morphodynamique des ambiances construites* 『都市の中のアンビエンスの動的形態』 Nantes University.

ヒトとモノ・カミをめぐるネットワーク： 福岡県篠栗新四国霊場を中心として

ラモット・シャルロット

本研究は福岡県糟屋郡篠栗町に関して宗教人類学の立場から考察した。篠栗には四国遍路を模倣して成立した新四国霊場があり、天保6年（1835）に篠栗に立寄った遊行尼僧の慈忍によって創始されたと伝えられている。新四国霊場は本四国と同様に、八十八ヶ所の札所があるだけでなく、番外の新しい札所も多い。篠栗には沢山の寺院や神社、小祠・小堂があり、巡礼札所が狭い地域に点在して、濃密な宗教文化に満たされた地域社会である。宗教的職能者の動きも活発で、小祠・小堂には巡礼者だけでなく、僧侶や神職、行者や霊能者が複雑に関与する。一方、札所で一番の賑わいを見せる南蔵院（真言宗）には東洋一の涅槃佛があり沢山の参拝者が訪れるだけでなく、観光客も多い。篠栗では田舎と都会、宗教と商業、神と仏が混淆している。篠栗は外部社会と恒常的な交流を維持しつつ変化しているのである。篠栗の札所をめぐる巡礼は、現在でも毎年十数万に達し、幅広い出身地の人々が加わって、様々な類型を示している。新四国霊場は創設時から現在まで多様な変遷を見せ、地域社会の社会経済の発展に大きな寄与をしてきたことは間違いない。こうした背景の中で、篠栗でのヒト・モノ・カミの独自のネットワークを考察することが本研究の課題であった。

2012年度には調査を二回行った。参拝者が多い春は3月30日から4月8日まで行った。30日は遍路宿で調査の計画を立て、3月31日は篠栗の信者と一緒に札所巡りを始め、来音寺で行事に参加・聞き取りをした。12番・85番に参拝し、55番札所では堂守に聞き取り、以前のデータを確認した。4月1日は養老の滝で滝行見学、行者さんの聞き取り、大日寺にて聞き取り、2日は延命寺の団体と一緒に札所巡り、3日は札所巡り、金剛頂院にて聞き取り、香山観音堂、79番札所にて聞き取り、4日見性寺にて聞き取り、5日札所巡り、遍路団体の聞き取り、6日札所巡り、遍路団体の聞き取り、7日下町の大師講とともにお接待、8日帰京の日程であった。夏は7月10日から18日まで調査をした。10日経比寿屋、大日寺の聞き取り、11日見性寺の施餓鬼法要見学と聞き取り、12日成榮寺施餓鬼法要見学と聞き取り、13日西林寺施餓鬼法要見学と聞き取り、14・15日は札所巡り、16・17日は宮崎県西都市在住で篠栗で活動する霊能者のお宅を訪問、といった内容であった。

2012年度の調査は人とモノの関係性を明らかにすることを目的とした。成果として、“La pierre qui change: Vie et mort des statues à Sasaguri, Fukuoka”（変化する石—福岡県篠栗における生と死）と題する論文を執筆し、*Cahiers d'Extrême-Asie* 22（2013年刊行予定）に収録される予定で、トゥールーズ大学に提出する博士論文の一部に利用する。内容は様々な意味を持つ仏像の研究である。札所の堂守